

〔研究ノート〕

Pearl S. Buck の円熟期における
作品と改革運動について

佐 藤 重 夫

- 〈目 次〉 I The Patriot
II 第二次世界大戦中の改革運動
III Dragon Seed
IV The Promise

Pearl Buck の経歴の中で、最も輝かしい活躍をしたのは、1930 年代後半から 1940 年代前半にかけての時期である。この間の著作活動や改革運動の仕事は、すさまじいほどの勢いで続けられ、これまで以上の幅広い読者層を獲得した。その驚くばかりのエネルギーは、決して消耗することではなく、それよりノーベル賞受賞後から拍車がかかり、新鮮な活力と刺激を受け、多作傾向となっていた。そのころの代表的な二、三の作品と、彼女が並行して従事してきた改革活動の一端を考察したい。

I The Patriot

作家としての Pearl Buck の衰退は、即刻訪れたものではない。それは、依然として世間の注目と議論の対象となる小説が書けるということが、1939 年、The Patriot という作品の発表によって立証されたからである。この小説は Pearl Buck がノーベル賞受賞後の最初の作品で、1920 年代後半における上海での革命運動、蒋介石の出現、広東や上海などの共産黨員や左派の労働者、学生の即時逮捕、虐殺、中国国民党の財閥との結びつき、その後の日中戦争などを背景素材としたものである。

この小説の主人公 I-wan は、大学生で、上海銀行頭取の子息である。青年革命家 En-lan の影響を受けて愛国運動の学生指導者となり、「新共和政体を打倒し、更に新しい共和政体を樹立しようとする」⁽¹⁾ 夢多き青年の一人であった。蒋介石が新しく樹立した国民政府は、本拠地を漢口に整備統合している。これらの学生達は蒋介石を英雄とあがめ、彼の上海行きの方策を準備することが自分達の役目だ、と信じている。蒋介石の運動は、恐らく貧困を追放し、素晴らしい生活、労働条件を確立することにあつたのであろう。En-lan や学生連盟のメンバーと共に、I-wan は蒋介石を支援するよう、上海紡績工場の労働者達に蒋介石の思想を教え込もうと努力する。ゼネストが起こる。蒋介石は揚子江を下ると、若いインテリや貧しい人達が、蒋介石の到来を待ちわびている。しかし、蒋介石は上海の銀行と妥協したため、自由と改善を目指す、輝かしい夢は破綻してしまう。そのままの状態がしばらく続く。I-wan, En-lan, それに、その他

の学生革命家達は共産主義者としてのレッテルを貼られ、処刑のリストに乗せられてしまう。にもかかわらず、I-wan だけは父の財力と信望のおかげで、どうにか日本へ亡命することになる。

I-wan は、日本の、ある貿易会社に勤務し、間もなく日本の女性と結婚する。蒋介石や革命の失敗に全く幻滅感を抱き、もうこれ以上世界情勢に関心を持ちたいと思わなくなる。日本軍は中国本土に向け軍事行動を続け、また厳しい検閲を受ける日本の各新聞は、どれも満州国や中国での事件に関する報道が制限され、一方的な見解しか発表ができなくなる。新聞の宣伝記事によれば、多くの中国人は、日本の侵略者を歓迎しているが、日本軍は頑強な抵抗者や軍人に対しては徹底的な武力行使をするという。I-wan は、中国の戦線から帰還した義兄から、日本軍の残虐行為のことを知らされ、連日、日本の新聞に書かれた歪曲記事を読むたびに、ますます恐怖感をつのらせていく。ある日、I-wan の実兄がわが家に立ち寄ってくれたときも、日中間で大規模な戦争が始まろうとしていることを知らされる。愛国心や義務感に影響され、I-wan は中国のために戦おうと祖国に戻る。帰国早々、蒋介石の国民党と、中国北西部に追い込まれた中国共産党との合作を知る。国民党と共産党は、共通の敵、日本に対する武力同盟を結ぶことになるが、それにもかかわらず、日本軍の相繼ぐ勝利をくいとめることができない。蒋介石軍は奥へ奥へと追いやられるが、ゲリラ戦争を駆使する共産軍だけが勝利を収めることがままある。都市という都市は日本軍の手に落ちていくわけだが、この小説の終末部分で、I-wan は新ビルマ・ルートのことを耳にする。

The Patriot というこの作品は、先見性や、中国の現代史を解明する上で、かなり重要な価値があるので、政治的にも社会的にも重要な史的記述を提供してくれている。特に、蒋介石が上海へ到着するまでの、上海に関する的確な描写、蒋介石が日和見主義者で右寄り傾向の人物であること、日中双方から見た、満州および中国に対する日本軍の攻撃に関する見解の相違、日本に対する国共合作の問題、それに、国共間の基本的な相違、などについて木目のこまかい、巧みな描写がほどこされている。

この小説の第二部は、I-wan の日本滞在を取り扱っているが、中でも最も感銘

の深い部分である。文学に見られる日本人気質を、最もリアリスティックに、しかも、もっともらしく描写しているものと言えるであろう。日本人の愛国心や義務感、そして、忍耐力については、特に正確な叙述が施されており、日本人の繊細さ、礼儀作法、美的感覚などが、日本人の冷静さ、軍国主義、残忍さとは、似ても似つかぬ対照をなしている。日本人は悲しみや不運にもじっとそれに耐えていく。中国で死んだ息子達の遺骨を受け取る日本人の親達の極めて印象的な描写は、この小説の最も注目すべきところである。一人息子が国のために戦死したにもかかわらず、顔に微笑を浮かべ、心の中では泣いている一老人の複雑な心情を描写するところなどは、外国人作家とは思えぬ筆致であり、忘れ難いものがある。

1928年から1938年までの10年間の日本人の生活や態度などについては、報道機関による事実歪曲や、中国人の世襲財産に対する執拗極まりない略奪、そして、略奪品の日本への輸送、軍国主義者の支配、天皇崇拝に直結する軍閥への国民の献身というような形で、巧みにとらえられている。例えば、もしI-wanの愛する日本女性が、近い将来、日中間に全面戦争が始まることを知れば、日本の勝利のために多くの男子を産むことが当然の義務と考え、相手が男やめめの将軍であっても、自分を捨てて躊躇なく結婚したことだろう。そのことについては、Tama Muraki という I-wan の結婚相手の日本女性に「私の体は自分のものではなく、国に捧げたものなのです」と語らせていることでもわかる。

日本人と中国人の多くの相違点に対する I-wan の認識が、日本女性との結婚生活の中で、特によく表現されている。I-wan と Tama は互いに血の繋がりがあ
るわけでもなく、風貌も風習も全く異なる仲である。多くの面で考え方も異なるが、それでも I-wan は次第に Tama の強い義務感を理解するようになり、Tama も I-wan が祖国中国のために、帰国しなければならぬ必然性をすぐに理解する。このことだけは、I-wan に対し Tama が理解してあげられる心情なのである。

この小説はまた、日中両国の指導力の欠如ということについて鮮明に描かれている。蒋介石の挙動や、部下を支配し、鼓舞する才能についても強い印象が感じられる。同時に、彼は日和見主義者で、無節操な人物にも描かれている。

革命の目的にそむくことも、贈賄することも、また、その金を受け取った人を処刑したりすることもできる。蒋介石はキリスト教信者になったので、信頼できる人物でないかも知れない、と I-wan が銀行家の父に伝え、父の Wu は、「彼も確かにキリスト教の神を利用しているんだよ。……彼とはそんな男なんだ⁽³⁾」と、これまで I-wan が聞いたこともない冗談まじりで答えている。

一方、En-lan は、蒋介石の学生追放から免れ、共産主義の指導者になるが、本来、闘争や権力の獲得に関心を持っている男である。冷淡で、しかも、全くの無慈悲な男ではあるが、富者も貧者も厳格に管理したいと願っている。En-lan の愚直さだけでは、到底中国を支配するだけの包容力もなければ、見識もない、と I-wan は思うようになる。蒋介石も共産主義者も中国の究極の目的を満足させることはできない。ただ、日本に抵抗して、両者は協力して戦うことはできるが、戦争が終れば、どちらも中国が必要とする公正、かつ、展望ある指導力を発揮することはできない。これに反して、日本の統率力も決して節操のあるものでもなければ、分別のあるものでもない。結局、日中戦争に参加した両国民は、いずれも不適格で、狭量な支配者にもてあそばれることになるのだ、と I-wan は考える。

En-lan はかなり円満な性格に描かれ、日本人の気質や生活に関する描写も優れているが、時折、I-wan の性格描写には納得できないところがある。特に、三つの部分からなるこの小説の最初のところで、I-wan の革命の目標や理想、それに、家族を死にいたらしめて従容とした気持でいる個所などを納得させるだけの内面的心理が掘り下げられてはいない。この点、行動を通じて性格を導き出すというよりも、むしろ作者の意図がかなり押しつけられていることが分かる。しかし、この小説の他の部分では、I-wan の性格描写を納得させるようなところもある。すなわち、蒋介石に対する I-wan の幻滅感、日本滞在中の心理状態、および、その後の帰国の決意、そして、蒋介石の態度と En-lan の性格の分析——このような要素が論理的に、しかも、徹底的に究明されている点である。

The Patriot の執筆に当って、Pearl Buck は The House of Earth 三部作に見られる、詩的で半聖書的文体を用いてはいない。文体の簡潔さを保持しているが、散文自体には詩情もなければ、旋律的な筋の運びも見られない。にもかか

わらず、その簡潔さと事実在即した点に特徴があるだけに、それが却ってこの物語に全く相応しく、物語の進展にうまく適合している。物語の背景、特に、上海での各場面や、日本人にまつわる、いろいろな挿話をいかにも真実らしく見せるかに、この文体は確かに効果的である。

The Patriot の第三部は最も出来が悪い。この部分では、I-wan の中国への帰国、蒋介石との出会い、En-lan のゲリラ軍との最後の生活などについて叙述している。I-wan は、先ず、蒋介石の個人的な代理として En-lan のもとへ派遣される。このことは、明らかに蒋介石自身をこの戦争に巻き込むための、見え透いた、巧妙な叙述手段なのである。この小説の最後の部分における物語は、あまりにも外見だけの、こじつけである。例えば、蒋介石自身が I-wan の弟の死を知らせることだけで、遠隔の地からわざわざ彼を呼び寄せるといったくだりである。I-wan の昔の女奴隷が、En-lan の妻として現れてくるというもの、もう一つの仕掛けであり、それとはっきり分かるからくりである。確かに The Patriot は秀作である。村落の講師師が聴衆を魅了するような物語ではあるが、最後の部分で、未解決を懸念しすぎるあまり、何とか処理しようとする、行き過ぎた自由気ままさが、作品としての不利を招いている。

II 第二次世界大戦中の改革運動

第二次世界大戦中は、Pearl Buck にとって多忙極まる時期であった。創作活動だけでなく、連合軍による戦争遂行のため、可能な限りの協力をしようと考えた。⁽⁴⁾ アメリカと中国が、それぞれの見解や名案を互いに交換し合えるような戯曲を提供しようと、手広くラジオ・メディアを活用した。かつて、偽名を使い、ある大学のラジオ台本養成科に籍を置いたことがある。数ヵ月間、ラジオ台本の作成法を学んだ後に、何本かのシナリオを書いている。その作品の中には、当時、アメリカ陸軍情報局の要請で書き下ろした America Speaks to China と題する作品があり、6 回シリーズ・ドラマとして短波放送を通じ中国向けに放送された。その他の作品に、China to America とか、Will This Earth Hold? といったラジオ・ドラマもあり、それらを通じて、アメリカは中国軍の戦闘に

対して支援強化を保証する考えを提示している。また、Pearl Buck は「統一中国救援」を目標にした、幾多の戯曲も書いて⁽⁵⁾いる。

1941年、Pearl Buck は The East and West Association を設立する責任を負う立場にあった。この団体は、すべての国家の特質をよく検討し、目的や目標を調和させる手段を探求しながら、洋の東西をより緊密な関係に導こうとすることを目的としていた。彼女はこの団体での仕事を戦時中ずっと続け、特にこの組織の教育関係を担当していた。⁽⁶⁾

アメリカの参戦前から戦時中にかけて、Pearl Buck は数多くの演説を行ったり、基本的な諸問題を提起し、見解を明確にしようと、論文集、書簡集、パンフレットなどを刊行したりした。これらの著作物の中には、広く宣伝され、戦時体制という興奮状態の中で、主として見落され、忘れ去られていた視点を広く周知させることに成功したものもある。

戦時中における Pearl Buck の最も有名な論文は、Tinder for Tomorrow と題するもので、その趣旨については、新聞記事、演説、アンソロジーなどに発表⁽⁷⁾されている。それは、白人の人種的偏見が存続する限り、インド、マレーシア、フィリピン、その他東南アジア諸国の有色人種は、アメリカからの公正な取り扱いを期待することはできない、という日本側の戦時プロパガンダに繰り返し使われる最も露骨な主題について考察した論文である。その中で彼女は、中国人、インド人、その他のアジア民族は、個人的にも国家的にも、確かに白人によってしばしば虐待されてきたが、そのことをアジア人は決して忘れ去ることはあり得ないだろう、と強調している。従って、日本のプロパガンダというのは、確実な経験を根拠に置いたものであり、しかもそれは、白人に対するアジアの全有色人種の結集を図り、アメリカにおける黒人の実態を指摘しながら、説得力のあるアメリカ支持反対論をかき立てている。更に、あらゆる人種暴動や人種差別的行為も、却って日本のプロパガンダに油をそそぐ結果となり、日本はこのような材料を逆手にとって十分に利用していると言うのである。

Pearl Buck は、戦時中の講演や出版物の中で、繰り返し登場する主題となるものはアジア人の植民地支配や帝国主義からの解放である、と力説している。この問題の措置は、戦争に勝つまでそのまま待つのではなく、その重要性を評

働し、直ちに解決される必要がある。彼女は、白人優位、帝国主義に対するアジア人の忍耐も限界にきていると見ており、たとえ、枢軸国のドイツと日本が戦争に敗北しても、理論上、現時点において同盟にある白人に対して、後日互いに鋒を交えるときが来るかも知れないことを、アジア人はよく認識している、と主張する。この不測の事態を未然に防ぎ、日本のプロパガンダを妨げ、そして、アジアの有色人種を激励して、一層の闘志を掻き立てるために、アメリカは少なくとも、民主主義と平等が「白人だけに限定されるべきものではない」⁽⁸⁾ことを明確に宣言すべきことを訴えている。また、Pearl Buck は平均的アメリカ人の多重人格をも強調している。つまり、理論的に自由と正義を愛しながら、現実的に人種的偏見に満ちあふれている点を指摘しているのである。もし、アメリカがそのままの態度を固執するようなことになれば、人種的偏見は民主的なものではなく、ファシスト的なものである以上、理論上ヒットラーに与し、ファシズムの立場で戦うのと同じことだ、と断言する。幸いなことに、「女性解放運動」の場合と同様、1940年代以後、人種問題はかなりの改善が見られるようになった。

書籍、雑誌、演説、ラジオなど、あらゆる媒体を通じ、Pearl Buck は、万人のため完全な自由を求めて、戦時中ずっと改革運動を続けてきた。例えば、What Are We Fighting for in the Orient?や Freedom for All の論評の中で、⁽⁹⁾植民地主義政策の終息、世界各国の平等宣言を主張する必要性を公然と示し、これが実行されなければ、将来、戦争は絶えないであろう、と警告している。

戦争が続くにつれ、Pearl Buck は、米英両国が基本的な戦争目標として、普遍的平等を認めることをよしとしないうことを察知した。従って、初期の目的に変化が生じたことに気づいたのである。この戦争は自由を求めるための戦争ではなく、イギリス、フランス、オランダなどが、植民地を領有していることが原因して、日独伊枢軸国に対抗する戦争に発展していったに過ぎない。従って、「この戦争は万人の自由のための戦争だ」ということを言明できるほどの偉大な、先見の明のある指導者が西側列国にいなかったため、「この戦争を発端とする、別の戦争に、その後直面」⁽¹⁰⁾せざるを得なくなる。特にこのような発言があったのは、早くも1942年12月10日のことである。

中国は軍事戦略の面でも、兵器、特に飛行機の供与の面でも、同盟国の一員として平等の扱いを受けておらず、従って、恐らくその後の講和会議においても重要な地位は与えられないであろう、ということを Pearl Buck はすでに察知している。戦争勃発の当初でさえ、ヨーロッパ復興計画や食糧、医薬品の供給計画がすでに立案されていたが、インドにおける飢餓救済、極東各国における医薬品救援計画などについては、何も立案されてはいなかったのである。人類平等を目指す戦争どころか、「今や文明を救うための戦争でもなく、それはヨーロッパ文明を救済するだけの戦争に過ぎない」ほど、戦争の目的が極端にせばめられていた。Pearl Buck はこの制約を声を大にして反対するよう、アメリカ人に要求した。1941 年、アメリカ大統領だった Franklin D. Roosevelt が外交政策としてあげた四つの自由(言論の自由、信仰の自由、欠乏からの自由、恐怖からの自由)の中には、「基本的な自由、すなわち、自由であるための自由⁽¹²⁾」が含まれていない点を強く指摘した。中国だけが万人のための自由平等を宣言しているが、アメリカは不幸にも「他民族のためのものでなく、ある一部の民族のための自由、しかも、自由そのものでなく、価値観から見てさほど重要でもない四つの自由⁽¹³⁾」に限定してしまったのである。

Pearl Buck はアジア人の態度、感情、対枢軸国戦闘の真意について、アメリカ国民に啓蒙し続ける一方、戦時中特に強調して黒人に対する白人の扱い方の愚行さを理解させようと努力した。New York Times 紙の投書欄の中では、黒人ハーレム(ニューヨーク市のマンハッタン島北東部の黒人居住地)における犯罪増加の傾向について述べ、対策として、ある程度の懲罰を勧告した同紙社説に対して反論を加えている。この問題の根源をたどれば、すべては人種の偏見に起因することを明確に指摘している。黒人は就職をこばまれ、労働組合にも加入できず、等量等価の労働に対しても白人と同等の給金が得られず、しかも、環境のよい地域に住むことができないという差別の中での生活を余儀なくされている。防衛産業という公的な職務においてさえ、白人同等の給料や同種の仕事も得られないことが多い。軍隊内における人種差別政策についても納得できない、不正さがある、と述べている。彼女の叙述によれば、アメリカ黒人は、忍耐強く、謙虚であれば、結局は白人同様に扱われることになるだろう、

とたびたび言われてきたということだが、しかし、彼らにとってみれば、このような立場のむなしさ、絶望状態を知って、現状にいたたまれなくなってきたのである。アメリカには、黒人との主従関係を保持したいと思っている白人がかなり多いが、この主従関係は民主主義の精神に反するものなので、アメリカ人の思考体系の中から除去されるべきものだと、Pearl Buck は力説している。

アメリカやカナダで発行された、あらゆる黒人系の新聞、雑誌にあてた公開状(のちに選集の中に加えられている)の中で、Pearl Buck はアメリカ黒人の怒りや欲求不満をできるだけ和らげようと努めた。アメリカ黒人に対し、たとえ民主主義国家の恩恵を受けていなくとも、この戦争遂行には誠意をもって支援するよう、熱心に説いた。一方では、白人を敵に回し、有色人種は団結すべきだと言う、日本のプロパガンダを強く非難したりした。また、過去から現在にいたる、数々の不正行為に対して大目に見るということもしなかった。しかし、アメリカ白人の大多数は偏見の不正さを理解するようになり、偏見を取り除く必要を感得するようになってきた、と述べている。このような人達の信念が、民主主義の敵とも言うべきファシスト的なアメリカ人の考えを変えていくだろう、と論じたが、まさしく、その予言は的中した。

戦時中の Pearl Buck の講演や著作には、自由平等に関する、その他の諸問題にも言及している。すなわち、日系アメリカ人に対する虐待行為に抗議し、それには公正かつ思い遣りをもって扱うべきだ、と熱心に説いている。一方、日系アメリカ人に対しては、個々の市民やアメリカ政府がとった不条理で軽率な態度を理解し、宥赦してくれるよう懇請している。Pearl Buck はよくインド問題にも触れ、インドの自由と独立を支持してきた。しかし、インドには統一性に欠ける問題があり、このジレンマをイギリスは解決しようとし⁽⁶⁵⁾ないことを指摘している。かつて、イギリスはインドの完全な忠誠心と支持を得ることができたが、それは過去のことであり、インドは自らを統治し、試行錯誤の中で自治計画を確立する権利を持たねばならなかった。インドは独立を 150 年も待ち続けてきたが、当時、将来への期待は殆ど望むべくもなかったのである。自由はインドにとって必要不可欠のものであった、と述べている⁽⁶⁷⁾。まさに、時の経

過が Pearl Buck の達観を立証していると言えよう。

戦時中、Pearl Buck が発表した、もう一つの論文がある。それはアメリカの教会に向けられたものである。教会とは人間の自由と博愛を強調すべき理論的立場にあるとする彼女は、実際には、帝国主義の維持、黒人差別待遇主義の存続、アメリカの東洋人排斥といった諸要素が基本的な人権平等より優先するものと考えているものがかなり多い、と見ている。ナチズムに抵抗して、この戦争を必勝に導くような統率力を付与するのが教会の責務である、と主張する。教会は人種の偏見に反対する強力な立場を取り、博愛主義を実践に移す運動を起すべきで、このような運動こそが、世界を通じ連合軍の戦争遂行を助勢するだけでなく、戦争が終結すれば、公正かつ永続的な平和の基盤となり得よう。それは、「人類平等に基づかず、また、人類平等のもとで履行されない、いかなる条約も世界平和をもたらすことはあり得ない」⁽¹⁸⁾ からである。Pearl Buck は、宗教や教会にはその神通力が失われているのではないかとさえ思っている。事実そうでなければ、そのときこそ平等、博愛の義務を公然と宣言すべき、重要かつ適切な心理的絶好機であると考えていた。

第二次世界大戦における Pearl Buck の、もう一つの明確な思考傾向は、アメリカ人は戦時中に民主的特権を放棄すべきでない、という主張である。⁽¹⁹⁾ 戦時中、ある有力な学派は、ファシズムと戦っている間、アメリカ政府は相手の非難を受けるようなことをしてはならない、という信念をあくまで貫き通した。つまり、アメリカ国民は自国を危機に陥れるようなことを輕輕に口にしたり、輕率妄動に走ることがあってはならない、というのである。この見解に対して不当性を主張する Pearl Buck は、言論の自由こそ全体主義に対する民主的な保証であり、基本防衛策であるので、絶対放棄すべきものではない、と反論している。「ファシズムというのは、きまって知識人の疑問を抑えつけようとするところから始まる。この弾圧が成功すればすぐ、知識人は投獄され殺される。そして、その著作物はすべて焼却される」のである。⁽²⁰⁾ 国外でファシズムを相手に戦っているとき、国内でその信条を擁護しようとするれば、それは全くの当て擦りになる。

内外において、その後起きた出来事を考え合わせると、確かに Pearl Buck のものの見方には洞察力があり、現に起きている動向、特徴を見抜く基本的な

認識に満ちあふれていることがわかる。にもかかわらず、彼女の不断の警告や識見が、これまであまりにも顧みられなかったというのは悲しむべきことに違いない。しかし、彼女の予言が的中しながら、多くの読者層がその考え方に注目しなかったからと言って、彼女の努力が無効になったものでは決してない。これに反して、彼女のノンフィクション作品には分別があり、知性があり、思い遣りがあつて、しかも、時代を先取りしている。しかし、今日的に見ると、帝国主義の不当、人種的平等、公正の必要性に関する Pearl Buck の発言の多くは、論理や感覚の点から見て、殆ど平凡のように思われるが、こうした考え方には即時性があり、言葉では言い表わせない適時性がある。Pearl Buck は、孤立し、限られた視点からアメリカにゆさぶりをかけ、その態度を世界に明らかにしようと、常に努力してきた作家なのである。

III Dragon Seed

Pearl Buck は戦時中、さまざまな社会活動に携わってきたが、創作との縁は切れなかった。この事実は、読者の好評を得た彼女の傑作の一つ Dragon Seed を読めば明白である。The East and West Association から発表されたモノグラフの中で、Pearl Buck はこの小説の執筆根拠を説明している。⁽²¹⁾ 南京近くに住んでいた農民家族のことをよく観察していたので、日本軍侵略の恐怖に対する彼らの反応について、彼女はよく理解していた。これら中国の農民は、生れて初めて飛行機による破壊的な爆撃や、罪のない民衆への非道な殺戮、そして、ごく幼い娘や老婆に対し非人間的行為を犯すのを何度となく目撃している。南京地区の農民は、たびたび起こる盗賊の小ぜり合い、地方軍閥の指導者への襲撃には慣れているが、今までにこれほど激しい、無差別な残虐行為を経験したことがなかった。日本軍によるこの行為によって、農民の間に抵抗運動が起きた。結局、この運動が日本軍を間断なく悩ませ、苦しめることになる。日本軍の征服、それに付随する非人道的行為に関する情報などから、Pearl Buck は小説 Dragon Seed の基本的な枠組を構成したのである。

この物語は農民 Ling Tan と、その家族が中心となっている。彼らは南京から

三マイルほど離れた村落に住んでいる。Ling Tan には三人の息子と二人の娘がいる。長女は南京の商人と結婚し、Ling の息子達は父の畑仕事を手伝っている。家族は畑の近くに住み、こつこつと忠実に働き、普通の農民と変らぬ生活を送っている。Ling Tan は Wang Lung (The Good Earth の主人公) と同様、農地への強い愛着を持ち、Wang と全く同じような農業難題や心配事などのかかえている。こうした時期に、日本軍の侵略ということは考えられず、事実上、あり得ないことであった。ところが、時が経つにつれ、Ling 家とその隣人達は戦争の危機が迫るのをますます強く認識するようになってくる。南京や中国の内陸部へ向う途中の Ling の村落を、沢山の避難民が急いで通り過ぎていく。そして、日本軍による残虐行為の噂が、たちまちその地方へ広がっていった。爆撃機による南京空襲が次第に増え、規則正しい間隔で爆撃されるようになる。初め爆撃機を物珍しそうに感嘆しながら眺めていた農民達は、突然、空襲による死や破壊を恐れるようになる。日本軍が南京やその周辺地域に到達し、その野蛮行為に、征服される中国人は大きなショックを受ける。Ling Tan の息子の一人は、色情に飢えた数人の日本兵から暴行を受ける。日本軍の暴虐行為のほか、重税の賦課、その他の規制措置が中国人の地下運動を助長させる結果となる。中国のレジスタンス闘士達の主力が、ごく近くの山岳地帯に集結しているが、各部落民はできるだけそれに参加協力し、日本軍将兵を殺害する機会をうかがっている。Ling Tan の三人の息子も地下運動に参加し、Ling Tan 自身はこの活動における部落の指導者となる。

この辺まではリアルで、説得力をもち、洞察力の鋭い内容が、突然、突飛な作り話へと転じていく。Ling Tan の三男、Lao San はそのとき、山岳地帯の無情なゲリラ指導者となっている。彼のエネルギーと情熱をいくらかでも冷ますためには、女性が是非必要であることぐらいは、部下達も十分承知している。しかし、Lao San は非常にハンサムで、愛想のよい男だが、どうも平凡な女を軽蔑する。家族が冗談まじりで話すところでは、彼が求めているのは絶世の美人であるという。やがて、それに相応しい女性が現われる。その名は Mayli と言い、魅惑的で、自尊心が強く、教養があつて、しかも、強情な女性である。その女性は、確かに、ある点で、作者 Pearl Buck の最初の着想と思われる蒋介石

夫人(宋美齡)になぞらえている。⁽²²⁾在外駐在員の娘である Mayli は、日本軍に抵抗する仲間達を救援するため、祖国中国へ帰る決心をする。帰国後初めは、中国の内陸部にある女学校の教職に就くが、生徒達に対する、一層好戦的なゲリラ精神を植え付ける訓練を要求して、まもなく校長と激論となり、解雇される。ところが、在任中に、Lao San の妹 Pansio に邂逅する。Pansio は、兄の性格のこと、兄が嫁を求めているなどを Mayli に語った。Mayli のロマンチックな関心が高まっていく。ここで、物語は、起りそうもない作者の一連の巧みな虚構により、Mayli は Ling Tan の家を訪れるようにし、そこで Lao San に会うことになる。Lao San と Mayli は互いに愛し合うようになる。そして、Lao San は未占領地の内陸部における活動に彼女を参加させようと手筈を整える。

Dragon Seed が芸術品として成功していない主な要因は、Mayli に関する挿話にある。この Mayli 挿話というロマンチックな題材をリアリズムの文脈の中に押し込もうとする無謀な企てをとったからである。ゲリラ戦は続くだろうが、日本軍に抵抗する中国軍へ、連合軍が救援の手を差し延べるよう、ラジオ・ニュースが伝えるところで、この小説は終っている。従って、後半部分にロマンスを出現させるハリウッド趣味の手法によって、この作品の主題効果が弱められる結果となったのである。

Mayli という女性に対する Pearl Buck の扱い方は、まさに本来の物語作家による手法の陥穽、言い換えれば、ノーベル賞受賞後の創作が、ますます落ち込み、後年の大部分の小説を何らかの形でそこなっていくような欠陥を例証しているようなものである。伝統的なストリー・テラーであれば、その種類が何であれ、いかなる特徴もうまく生かすことができる。しかも、興味をそがないように、最も信じ難い、幻想的な、しかも、あり得ないような出来事を挿入しても不自然さを感じさせない。しかし、より真面目で、より技巧の優れた作家ともなれば、そのような非現実的な事柄に対する責任をとらなければならない。この点からみると、Dragon Seed には重要な弱点が見られるのである。つまり、基本的にリアリズムである素材に、架空のロマンスが入り込み、それが出来事の信憑性と人物描写の効果をうすめてしまったのである。

Dragon Seed に見られる、もう一つの欠陥は、この小説を愛国的なプロパガン

ダの媒体として利用しようとする意識的な試みがあったことである。このことは、この戦争が罪惡に対する世界的な闘争の一部であることを中国人に知らせようとするラジオ・ニュースの場面がよく暗示している。中国人民やレジスタンス闘士達は、このラジオ・ニュースの情報に勇気づけられ、ますます敵に抵抗するようになっていく。そして、この小説はイギリスやアメリカ軍の支援を期待しながら終わっている。Dragon Seed は、1942 年 1 月 22 日に出版されたが、脱稿したのは、連合軍が対日戦に突入する以前である。従って、この小説の根拠は、中国に対し、より強力な支援が必要であり、要望される点に置かれ、中国のため共感を喚起する意図があったのは明らかである。

こじつけのロマンスや、明白なプロパガンダを挿入することで、Dragon Seed は小説としての魅力をそこなっているが、それが却って価値観を高めている面もある。その最も魅力的な特徴は文体である。Pearl Buck は、A House Divided を執筆して以来、初期の半聖書的、半伝統的な文体を用いてはいなかった。特に、The Good Earth で効果を奏したこの文体は、Dragon Seed に用いられ、かなり成功している。文体を飾らず、時折、詩的で柔軟な、そして、素材に生き生きとした新鮮味を備えた Dragon Seed の散文には人々の耳目を引くところがある。二、三の言葉を変えれば、Hemingway の作品と思われるような文章が多い。例えば、日本軍の最初の南京空襲後の反応を叙述する、次の文章などは、A Farewell to Arms の文体と作風に類似している。

The next day the flying ships came back again and the day after that, and again on the next day and the next, and every day they came back and the city was scourged by death and by fire. But Ling Tan did not go there again, nor did any of his house. They stayed where they were and tended their crops and put by their food for the winter as they did in every other year. The only change they would allow the enemy was that when the ships came over their heads now they left the field and hid themselves in the bamboos. For one day a flying ship had dipped low like a swallow over a pool, and had cut the head clean from a farmer who stood staring at it.

文体の一貫した卓越性という点では、Dragon Seed は The Good Earth に近い。ただ、この散文は Pearl Buck の最も有名な小説とされる The Good Earth ほど詩情と表現の変化を持ち合わせていない。

Dragon Seed と The Good Earth との、その他の類似点も明らかである。農地に対する同じ価値観が双方の作品にくっきりと現われており、しかも、同じ静かな語調と二世代の生活に集中する年代順のアプローチが、この二つの小説を特徴づけている。しかしながら、The Good Earth の方は、何回となくクライマックスにもっていく方法がとられているのに対し、Dragon Seed には、決定的な関心の高まりがなく、平板で着実に進行する傾向がある。両作品とも、時折、Emile Zola のような自然主義に近いリアリズムが含まれている。Ling Tan の息子の暴力行為は、かなり衝撃的な価値があるが、商人である Wu Lien の肥満な老母を暴行し、不具者にするという手法は、手応えのある文学的効果を高めるための、扇情的な素材の濫用と言うほかはない。Dragon Seed という小説は、日本軍の行動を、あるときは生き生きと、あるときは陰悪に描写している。事実、この作品がより現実的な水準を維持し、ロマンスをリアリズムから分離し、しかも、The Good Earth に示されたような作家の客観性を保持していたとすれば、幾多の点で、Pearl Buck のピューリッツァー賞受賞作品 The Good Earth と匹敵するものとなっていたであろう。

IV The Promise

Dragon Seed の続編として書かれた The Promise(1943年)は、主としてビルマにおける中国軍の戦闘状況を扱った作品である。Ling Tan と家族は敵の占領下での生活を続けながら、中国に対する米英連合軍の救援の約束を実行してくれるのを待ち望んでいる。一方、彼の三男、Lao San は中国の自由地区へ行き、結局は Long Sands の勝利となる幾多の戦争に参加する。Lao San は上官からの命令で Sheng と改名し、昇進する。連合軍の戦略により、中国軍は日本軍の猛攻を受けているイギリス軍を救出するため、ビルマへ兵士を送るよう要請される。Sheng はビルマ戦線での分隊長に選出される。ビルマへ同行したのは、Dragon

Seedの後半に登場させ、同作品の評価を下げた、世にも稀れな、あの Mayli である。ここでは、彼女は従軍看護婦長として登場する。中国軍はビルマ・ルートを前進するが、ビルマ国境地帯に差し掛かると、そこで数週間も停滞せざるを得なくなる。尤も、疲労困憊のイギリス軍がすぐにも救援の手を必要としているのは、誰の眼にも明らかなことである。

中国救援軍が戦闘につくころ、重要な地区であるラングーンの港町は陥落しており、イギリス軍は混乱し、退却している。中国救援隊への要請が遅れたことと、連合軍部隊間の調整が不十分であったことから、撤退が余儀なくされ、多くの犠牲者を出す結果となる。結局、中国軍はイギリス軍の Irrawaddy 河渡河撤退作戦を支援するよう要請される。英中両国軍が河を渡り、安全地帯に辿り着くと、包囲する日本軍からすぐ追撃されないように、橋の破壊工作を図る。中国軍は勇敢に戦い、イギリス軍の渡河撤退を成功させる。ところが、イギリス軍は早まって橋を爆破してしまうので、中国軍の大部分の兵士達は逃げ場を失い、その場で惨殺されてしまう。Sheng と、その他の数人の兵士だけが生き残り、そのまま中国へ引き返していくが、イギリス軍の行動や、白人兵が中国軍を真の仲間、同盟者として扱うことを避ける態度に、中国軍は幻滅を感じてしまうのである。

The Promise は歴史小説である。しかし、ビルマ国境での中国軍の長期間にわたる待機、戦線への到達が遅れて状況好転のできなかったこと、橋梁破壊、それに続き、中国軍が罠に掛けられたこと——これらの出来事や、その他、幾多の事件はすべて史実に沿ったものである。従って、この作品は、ビルマにおける中国軍の身にふりかかった惨禍を思慮深く、魅力的に解説しているので、歴史的重要性を呈している、とすることができる。ビルマ戦線の総くずれの際、オブザーバーや新聞報道班員の中には、中国軍が遅れて参戦したのは、人種的偏見が原因だと見るものが多かった。つまり、イギリス軍は、ビルマ兵やビルマに服務するインド兵に、それぞれ自国の将校が指揮する土民軍にさえ遭遇させないようにしていたし、また、中国軍は、敗走するイギリス部隊を救出するための弾除けとして利用されていた、という非難も聞かれたりしたからである。この考えは、今もある地方に強く残っている。

しかし、The Promise での登場人物の台詞の中に「あんたら白人達は……互いのメンツばかり考えている」と語らせていることを思い起すと、そうした総くずれの根源は、「公式」の見解では、戦術上の手違いや、貧弱な軍事計画にあるとされている。とは言いながら、Pearl Buck の解釈も、公式的な見解も事件の全貌に関係しているのは明らかなようである。ただ、否定できないのは、中国軍がイギリス軍から受けた扱いに対する幻滅感である。確かに、ある種の人種的偏見ということも明らかであろうし、イギリス軍が戦闘に真剣に取り組もうとしなかったことも明白である。というのはビルマが中国への重要な補給路であることを理解していなかったためである。ビルマが陥落すると同時に、ビルマ・ルートは遮断され、それ以後の中国への補給品は空路だけに頼るしかなく、中国の苦境はますます悪化した。あるエッセイの中で、Pearl Buck は、イギリス軍が自陣を守るために塹壕を掘ったり、犠牲を払ってまでビルマの支配権を保持することに特に関心を持っていたわけではない、と指摘した確かな目撃者達のことを述べているくだりがある。

The Promise は、あらゆる点で徹底したプロパガンダであり、中国人の理想である、愛国的かつ感動的な訴えを行っている。白人の偏見、アジア人に対する白人の優越感、中国人に対する平等な扱いへの拒否、そういう態度こそが原因で対日戦争を引き起したという罪悪感など、これらの問題については、すべてこの小説を通じ繰り返し述べられている。この作品はまた、これまで飛行機やその他の必要兵器の供与を殆ど受けなかった中国軍が、それでも救援の手を求めようとする殊勝な心掛けを公然とほめたたえている。

The Promise はプロパガンダで一貫しているので、殆ど芸術的価値はない。Sheng と Mayli の途方もない情事の場面に、読者を憤慨させるようなところもある。Mayli は中国の理想実現のために、わざわざ中国へ戻ってきたのだが、Dragon Seed の後半や、この小説の前半では、ただ心にロマンスだけを抱く女性としか描かれていない。思いのままに、どこへでも飛行機に乗って出掛けられるような女性(ある意味では、George Bernard Shaw の戯曲から飛び出してきたような女性)に描かれている。蒋介石夫人の非公認オブザーバーとしてビルマ戦線へ派遣させるという設定も、いかにも作為的で、まやかすぎるため、この小

説の迫真性が信じられなくなる。

Sheng と Mayli が生き延びられたことや、物語の結末近くになって巡り会うという場面も、その処理の仕方が混然としている。更に、ロマンチックな関心事が、作品背景として欠かすことのできないリアリズムの質的効果を低下させている。Mayli と Sheng の情事については、Edmund Wilson が別の本の中で巧みに述べている。その論評が、まさしくこれに適応している。つまり、「この小説は、虚構をからませた、扱いにくい磁気の山を、多くの作家達がいづくばっているような様子を『ハリウッド』の需要を意識しながら構成されたものだ」と。

The Promise の文体は、Dragon Seed の手法と同じだが、明らかに Dragon Seed よりも書き急ぎのきらいがあり、単調で、しかも、詩的表現に欠けている。だが、時折この散文の所々には、訴えるものがある。例えば、次の文章は、Pearl Buck の最高作品の特色を醸し出していると言えよう。

Wounded men and whole, all were alike, and what the enemy in the sky did not do, the enemy pressing furiously from the earth finished. In so little time that the sun had scarcely crept above the clouds, the battle was over, and the enemy vehicles and the marching men and the airplanes were sweeping furiously northward, a typhoon of men and metal. And what lay behind lay unburied by the road that ran through the jungle.

The Promise の主な関心事は、文体ではなく、歴史的なものである。この作品は創作だが、部分的には第二次世界大戦における重要な戦闘の真のドキュメントでもある。そして、この小説の主要な主題が、全体的に、あるいは、部分的に受け入れられるものなのかどうか、その視点に対する有力なケースともなる作品である。

〔注〕

(1) Pearl Buck, The Patriot (New York : Day, 1939), p. 14.

(2) Ibid., p. 211.

- (3) Ibid., p. 325.
- (4) Pearl Buck の戦時中の活動に関する最も詳しい記事は、Henry Lee の“Pearl S. Buck——Spiritual Descendant of Tom Paine.” *Saturday Review of Literature*, Dec. 5, 1942, pp. 16-18 に見られる。
- (5) Pearl Buck 作のラジオ台本の中で、最も身近なものと言えば、Arch Oboler と Stephen Longstreet (New York : Random House, 1944) 編集による *FreeWorld Theatre* に掲載された“China to America” pp. 140-150, および、Erik Barnouw (New York : Farrar and Rinehart, 1945) 編集による *Radio Drama in America* に掲載された“Will This Earth Hold?” pp. 17-30 である。Pearl Buck のラジオ台本のいくつかは、*Asia Magazine* にも発表されている。
- (6) Henry Lee, p. 16.
- (7) Pearl Buck, “Tinder for Tomorrow,” *Asia*, March 1942, pp. 153-155. この論文は 1942 年 2 月 10 日、New York 市で行われた演説の基礎となっており、Pearl Buck の *American Unity and Asia* (New York : Day, 1942), pp. 22-23 の中に加えられている。
- (8) Pearl Buck, *American Unity and Asia*, p. 27.
- (9) Ibid., pp. 43-62.
- (9) Pearl Buck, *What America Means to Me* (New York : Day, 1943), p. 110.
- (11) Pearl Buck, *American Unity and Asia*, p. 113.
- (12) Ibid., p. 118.
- (13) Ibid., p. 119.
- (14) 別の論文で Pearl Buck は、労働条件における非差別的慣行を要求した連邦政府の契約に抗議したアラバマ州知事の言葉を引用している。“Freedom,” *What America Means to Me*, pp. 43-44
- (15) Pearl Buck, *American Unity and Asia*, pp. 96-104.
- (16) インド問題に関する Pearl Buck の最も重要な論評は、*American Unity and Asia*, pp. 56-62, 74-95, および、*What America Means to Me*, pp. 51-66, 154-180 に出ている。
- (17) Pearl Buck, Lin Yutang, et al. *Freedom for India Now!* (New York : Post War World Council, 1942).
- (18) Pearl Buck, *What America Means to Me*, p. 132.
- (19) 特に *American Unity and Asia*, pp. 124-140 を参照。
- (20) Pearl Buck, *What America Means to Me*, p. 131.
- (21) Pearl Buck, *The Story of Dragon Seed* (New York : Day, 1944).

- (22) first name が類似していることも、この譬えを暗示している。蒋介石夫人の first name は Mei-ling である。
- (23) Pearl Buck, *Dragon Seed*, p. 86.
- (24) Pearl Buck, *The Promise* (New York : Day, 1943), p. 202.
- (25) Pearl Buck, *What America Means to Me*, p. 120.
- (26) Edmund Wilson, *Classics and Commercials* (New York : Farrar, Straus, 1950), p. 132.
- (27) Pearl Buck, *The Promise*, p. 222.